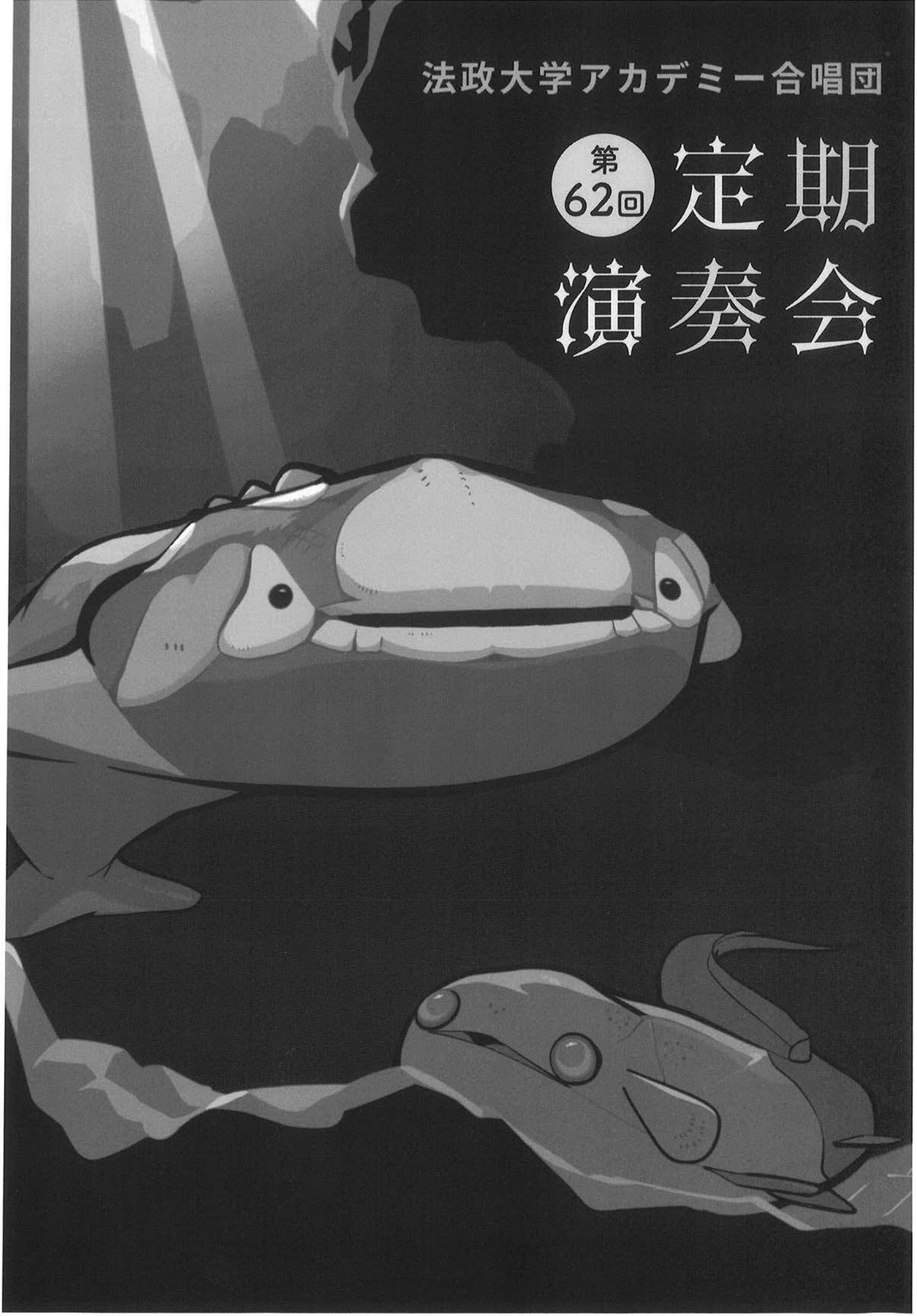
法政大学アカデミー合唱団

第62回 定期演奏会



法政大学アカデミー合唱団

第62回 定期演奏会

2023年12月22日(金) 17:50開場/18:30開演

法政大学校歌

佐藤春夫作詞

若きわれらが
命のかぎり
ここに捧げて
あゝ愛する母校
みなかすみの
富士の巌の雪
ほたる集めん
内の外濠
良き師 良き友
つどい結ぶ
法政おゝわが母校
法政おゝわが母校

本日は法政大学アカデミー合唱団第62回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。今年も多くの方々にご支援頂きながら、団員一同この日を楽しみに練習に励んでまいりました。

さて今回のプログラムでは、第3ステージにて弊団音楽監督の小久保大輔先生の指揮でSunrise Massを演奏します。今回は小久保先生を通じてアンサンブル・ミューズの皆様にご出演頂くことになりました。豪華なオーケストラとともに演奏するという貴重な機会を頂けましたこと、大変光栄に存じます。素晴らしいオーケストラの演奏に負けぬよう、団員一同精一杯演奏してまいります。

また、今回定期演奏会は62期の団員にとって最後の演奏会となります。今まで一緒に頑張ってくれた後輩たちと、悔いのないよう全力で楽しみながら演奏をお届けします。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

最後になりますが、本日の演奏会にあたり、ご指導くださいました先生方、厚くご支援賜りましたOBの皆様、ご出演頂いたアンサンブル・ミューズの皆様、そしてご来場くださいました皆様に改めて御礼申し上げます。

法政大学アカデミー合唱団代表 関矢夏歩

Message

法政大学総長

廣瀬 克哉

法政大学アカデミー合唱団公演の開催を、心よりお喜び申し上げます。

アカデミー合唱団は、1962年に発足した、60年をこえる歴史を有する混声合唱団です。現在も1年生から4年生まで多くの学生が団員として精力的に活動しております。今日まで長きに亘る歴史を築き上げ、数々のコンクールで輝かしい実績を収めてこられたのも、指導者の先生方と学生団員の努力ばかりでなく、こうして公演に足を運んでくださる皆様の応援の賜物と、深く感謝しております。

ようやくコロナ後が見えてきた2023年、法政大学の入学式でも校歌斉唱を復活させることができました。声を合わせて歌うことには、人の心を結びつける力があることをあらためて実感させられました。歴史ある合唱団に所属しながらも、声を出すことさえ難しい時期の経験を経たことによって、団員たちはあらためて合唱というものがもっているかけがえのない価値を確認しているのではないかと思います。そして、公演のステージに立って目の前の聴衆の皆様に唄を届けることができる歓びを、以前にも増して感じているに違いありません。ぜひそんな思いを受け止め、音楽を楽しんでいただければ幸いです。

最後になりましたが、今後も彼らの活躍に、あたたかいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

法政大学アカデミー合唱団部長

西田 幸介

本日は、法政大学アカデミー合唱団第62回定期演奏会にご来場くださり誠にありがとうございます。また、平素よりご指導をいただいている指導者の先生方、当団を支えてくださっているOB会の皆様方に、心よりお礼を申し上げます。

ここ数年、コロナ禍によって当団の活動も大きく制約されてきましたが、本年度から、いわゆる5類移行とそれに伴う本学による学生の自主活動の制限の解除により、団員たちは、以前と同じように合唱に打ち込むことができるようになりました。団員にとって、アーリーサマーコンサートから始まり、夏合宿を経て、今回の定期演奏会に至るプロセスは、学生時代の大切な体験です。それを従来どおりに踏むことができたということだけで、今年度は当団にとって良い年であったと思います。私も、学生の成長に寄り添う大学人として、嬉しく思います。

今回の演奏会は、3ステージ構成となっています。第1・第2ステージには、日本語の、比較的馴染みやすい楽曲が選択されている一方、最終ステージで、団員たちは、かなりの大曲に取り組みます。これらに向けて、団員たちは、指導者の先生方のご指導の下で厳しい練習に励んで参りました。本日はその成果を存分に発揮してくれるものと思います。「アカデミーの歌声」を心ゆくまでお楽しみください。

法政大学アカデミー合唱団OB会会長

吉田 和典

本日は、法政大学アカデミー合唱団第６２回定期演奏会にご来場頂きまして誠に有難うございます。OB・OGを代表いたしまして心より御礼申し上げます。

コロナは5月に5類となりようやく落ち着きを取り戻しつつあります。しかし、まだまだ油断の出来ない状況は続いており、団員は練習回数や練習時間などの制約がある中、自主練習を増やすなど工夫を凝らし本日の演奏会を迎えることが出来ました。

現在の団員は全員がコロナ発生後の入団です。特に本日が学生時代最後のステージとなる４年生はコロナ発生直後に入団し、少ない人数ながらアカデミーを引っ張ってきてくれました。満足のゆく４年間ではなかったと思いますが最後は思う存分楽しんで歌って下さい。学生時代に出来なかった分、卒業後も合唱を継続して歌う喜びを引き続き味わって欲しいと思います。

今年度は蔵王での夏合宿を４年ぶりに行いました。コロナで出来なかったアカデミーの伝統も徐々に戻りつつあります。アカデミーの伝統に触れつつ行われる１年の集大成となる定期演奏会は非常に楽しみです。ご来場の皆様も是非お楽しみ下さい。

最後に音楽監督の小久保先生始め諸先生方・大学関係者、他ご支援頂いている方々へこの紙面をお借りし深く感謝申し上げます。

東京六大学混声合唱連盟理事長

前島 遼太

法政大学アカデミー合唱団の皆様、定期演奏会の開催、誠におめでとうございます。連盟員一同を代表して心よりお慶び申し上げます。

世間ではAIが世界を一変させると言われています。将棋では、藤井聡太王位でさえも圧倒するAIが開発されました。しかし、人々が熱狂しているのは最強AIではなく、藤井王位の天才エピソードや、並外れた努力のストーリーです。単純な強さだけではなく、それに至るまでの努力に価値が見出されているのは興味深いです。

音楽の世界でも同じことが起きようとしています。世界一の歌手を凌駕するAIが開発されるかもしれません。そのような時代になっても、実際の人間の緊張した面持ち、昔とは見違えるほど成長した立派な姿、練習の努力を感じる息遣いに感動が生まれ続けることと思います。

一年の集大成となる定期演奏会で、日々の研鑽の成果を発揮され、素晴らしい音楽になることを願っております。末筆ではございますが、貴団の益々のご発展をお祈り申し上げます。

Program

1st stage

木下牧子
アカペラコーラスステージ
作曲：木下牧子

いっしょに
詩：くどうなおこ

さびしいカシの木
詩：やなせたかし

夢みたものは…
詩：立原道造

祝福
詩：池澤夏樹

指揮：村瀬真秀子

2nd stage

混声合唱とピアノのための
「くちびるに歌を」
作曲：信長貴富

1.白い雲
詩：HESSE,Hermann
訳：高橋健二

2.わすれなぐさ
詩：ARENT,Wilhelm
訳：上田敏

3.秋
詩：RILKE,Rainer Maria
訳：茅野蕭々

4.くちびるに歌を
詩：FLAISCHLEN,Casar
訳：信長貴富

指揮：山中緑
ピアノ：石井京子

~intermission~

3rd stage

Sunrise Mass
作曲：Ola Gjeilo

1.The Spheres
2.Sunrise
3.The City
4.Identity

指揮：小久保大輔
弦楽：アンサンブル・ミューズ

木下牧子 アカペラコーラスセレクション

指揮：村瀬 真秀子

「易しい」と言われる曲の難しさを感じた定演期だった。

「いっしょに」「さびしいカシの木」「夢みたものは…」は、幅広い層に愛唱される木下牧子の定番曲である。「祝福」もけして高難度ではない。しかしそれは、機械的に正しい音を出すのが比較的「易しい」というだけであって、詩の意味や言葉の響き、各声部の役割と全体の作りなど、考えるべきことはとても多い。むしろ単純な構成の曲ゆえに演奏の粗は目立ちやすく、難しさを実感してきた。それらにひとつひとつ向き合い、より緻密で繊細な、音楽だけでも詩だけでも成立しえない「合唱」を作るのが今演奏会期における目標であった。

「いっしょに」

混声合唱曲集「光と風をつれて」の1曲目。ひらがなだけの詩を体現した、穏やかで単純な三度和音で曲は幕を開ける。曲の末尾では冒頭のメロディがもう一度繰り返されるが、冒頭ではp（弱く）だった強弱記号はこのときpp（とても弱く）に変わっている。重要なフレーズは大きな音で派手に奏でられるとはかぎらない。立ち止まり、他愛ない話を、声を張り上げずに。繊細な演奏が求められる曲である。

「さびしいカシの木」

幼少期に父母と別れたという、作詞者自身の体験をもとに作られたともいわれる詩に、童謡のようなメロディが付されている。伸びやかなハーモニーは自分を顧みることなく去っていく自由な雲や風を想起させ、優しい曲調が、その場から動けない木というものの寂しさをむしろ大人びた雰囲気で伝えている。

「夢みたものは…」

立原道造は、わずか24歳で結核によって夭折した詩人である。私たちとさほど変わらない歳の詩人の「夢みたものはひとつの幸福 / 願ったものはひとつの愛」という言葉には、穏やかで美しいだけの言葉にはけして持ちえない重みがある。冒頭、バスパートは平坦に同じ音を繰り返すことで、曲全体の清潔さを支えている。単純ながら、一貫して力量の問われる曲であろう。

「祝福」

混声合唱組曲「ティオの夜の旅」の1曲目。拍子は目まぐるしく変わり、詠唱のように非常に言語的に音楽は進行する。折り重なるようなポリフォニックな響きの中、すべてのパートが幾度も歌う「光あれ」は、言うまでもなく創世神話の冒頭からの言葉。だが、敬虔さや原初への思索に重きが置かれ、特定の宗教的な匂いは適度に排されているように感じる。

ア・カペラは原初的な合唱の形だ。無駄がなく、立体的で、建物の骨組みのようだと思う。そして日本語は多くの団員にとっての母語であり、それらにきちんと向き合うことは、私たちにとって原点回帰といってよいだろう。それが「易しい」はずはないのである。

「いっしょに」に始まり、「光あれ」に終わる本ステージ。どの曲も、原点の緊張をもって演奏したいと思います。

村瀬真秀子

学生指揮者

村瀬 真秀子

文学部日本文学科3年。指揮法を髙坂徹氏に師事。
高校時代は合唱の強豪校で女声合唱を経験、全日本合唱コンクール全国大会で銀賞を受賞。彼女は豊富な楽理知識と文学への熱意を持ち、いつも団員たちに優しく、的確な指導を行っている。後輩と同期にとって頼りになる存在だけではなく、先輩たちにも厚く信頼されている。今回の村瀬ステでは、木下牧子のアカペラ作品から緩やかな、ハーモニーの美しい4曲を選び出し、皆さんにお届けする。4人の詩人による暖かい詩句は木下の編曲と村瀬の指揮を通じてどのような魔力が生じるだろうか。皆さん、短い時間だが、音楽と詩句の海で、私たちと日常にあるささやかな幸福を探しながら、しばらくいっしょに、すごしませんか。